

インダス・プロジェクト ニュースレター

第7号

2010年8月5日発行

ごあいさつ

今年の夏は大変暑いですが、皆さんいかがお過ごしでしょうか。

いつもプロジェクトにご支援ご協力賜り、ありがとうございます。早いもので、プロジェクトが本研究になって4年目になりました。あと1年半でプロジェクトは終了を迎えますが、これからはプロジェクトの成果をまとめて行かなくてはなりません。今年はインドでおこなった発掘成果を報告書として出版する予定です。また、古環境研究グループの成果も徐々にまとまりつつあります。もう一踏ん張りです。ゴールに向けて、皆さんとともにがんばっていきたくと決意を新たにしております。

さて、ニュースレター7号をここにお届けします。今回は今年1月末におこなわれた、インドのグジャラート州ブジで開催された国際会議（ブジ・ラウンドテーブル）の特集号です。インドでの発掘は昨年度で終了しましたが、インドでプロジェクトの成果を発表する機会をもちたいと考えておりました。その意をくんで、カーンメール遺跡の発掘を一緒におこなった、グジャラート州の考古局のY.S. ラウトさんとラージャスターン・ヴィディヤピートのJ.S. カラクワールさんが今回の国際会議開催を引き受けてくれました。ラウンドテーブルは1月28日から31日にかけて、ブジのプリンス・レジデンシー・ホテルにておこなわれました。

会議には、フィンランドのA. パルボラさんやイタリアのM. トーゾィさんなど海外からの参加者をふくめ、インド各地から多数の研究者、院生学生が参加されました。28日から30日は会議をおこない、31日はドーラーヴィーラー遺跡までのエクスカージョンというプログラムです。会議の重要なトピックはインダス文明のなかでのグジャラート州遺跡の特徴を議論することでした。い

くつかの遺跡から出土された土器も持ち込まれ、活発な議論がおこなわれました。その成果はいずれ出版される予定で、カラクワールさんを中心に現在原稿を集めているところです。

今回、日本から地球研の研究者すべてが参加したのをはじめ、コアメンバーのうち、生業研究グループの大田（福井県立大学）をのぞく、古環境研究グループの前空（広島大学）、伝承文化研究グループの後藤（東北大学）、物質文化研究グループの宇野（国際日本文化研究センター）、新しく立ち上げたDNA研究グループの斎藤（国立遺伝学研究所）の各氏が参加してくれました。とくに、後藤さんはヨーロッパで研究するというインド学の伝統にしたがって、これまでインドに行ったことがなく、今回生まれて初めてインドに行かれました。また、松井さん（東京大学東洋文化研究所）や斎藤さんなど、これまで一緒にインドへ行く機会がなかった、その分野で名をなしている研究者たちも参加してくれました。そういう一流の研究者がインドの辺境の地ブジやインダス文明遺跡に集う機会はめったにないので、代表して、後藤さん、松井さん、斎藤さんの三名に、今回のブジ行きの感想を書いていただきました。ニュースレターへの寄稿を快諾してくださったお三方に、ここで謝意を表します。

日本から参加された皆さんには、会議の中日の1月29日に、国際会議が継続するなか、われわれが発掘をおこなったカーンメール遺跡とカッチ湿原のなかにある紅玉髓の原石が採取できる場所に行き、インダス・プロジェクトの発掘現場を直接見学してもらうことができました。この機会を作ってくれたカラクワールさんに、この場を借りて御礼を述べておきたいと思います。この日帰りツアーと最終日のドーラーヴィーラー遺跡へのエクスカージョンは、プロジェクトメンバーで、インダス文明を実感として体験したことのない方に身近に感じていただけたのではないかと、ひそかに喜んでます。

ただし、反省点もありました。水が問題だったのか、食事がよくなかったのか、原因がはっきりとしませんが、体調を崩される方が結構いらっしまったことです。とくに、宇野さんなどが現地の医者に回診をお願いすることになったり、松井さんなどがドーラーヴィーラー遺跡のエクスカージョンに参加できなかったりしたのは残念でした。大事にはいたらなかったのがせめてもの救いです。

来年度はいよいよ最終年度です。予算が許すならばもう一度インドで国際会議を開催したいと考えておりますが、そのときにはまた参加していただければ幸いです。今後ともどうかよろしく申し上げます。

プロジェクトリーダー
長田 俊樹

ぶじ往還の記

後藤 敏文（東北大学）

初めてのインドであった。インドと関わる仕事はしてはいても、古い時代の文献を専門とし、かつ、その前史に興味の中心があるため、現代インドは遠い地のままであった。地球研とそのネットワークのお蔭でとうとうインド、ブッジ Bhuj（以下ブジとする）に行くことができ、私個人にとっては人生の一快事であった。考古学、フィールド研究の実際やその成果を吟味する術を知らないで十分に理解が至らないが、人間の営み自体を対象とし、人類普遍の理性を以て判断することに変わりはないから、私の頭の中を去来したことどもを書いても許されるであろう。しかし、専門にする古インドアーリヤ語（サンスクリット）文献と、インダス文明、そして現代の生活との間を具体的にどう組み立てて理解すべきか、改めて見通しが立たないことに気づく。インドでわしも考えた、とは行かないことを白状しておく。ただし、全くの素人旅行というわけでもない。インダス文化圏の時代に近い文献資料については、おそらく理解の最先端にいる者の一人であることを自負している。しかも、この分野の新知見は翻訳や概説書からは得られない。と能書きを張っておいて、幾つか問題提起を心懸けたい。

1. 水

なんといっても「水」が気になる。乾期には塩分の

濃い平原が中心であるが、一年を通してどのような環境であるのか、そして、当時どうであったのか。海や河川網との関係は。河川から水がもたらされることで氾濫原が季節的に海まで連なり広がると考えるのが自然であるが、現在どうなっているのであろう。季節的湿原地帯は Rann とよばれるそうであるが、上流からの水が湖を作り、部分的にのみ海に連なるとしても大規模な潟湖のようなものを形成するであろう。その場合塩分はどれほどのもので、耕作や牧畜はどのようになされるのであろうか。その上で、紀元前 3 千年紀の状態を想定してみる。秋田県の象潟は 1804 年の大地震で、いわば松島のような状態から隆起して生じたものと聞かすが、カッチー帯の広大な領域にそのようなことが起こっていれば知られていない筈は無かろう。しかしまた、象潟の隆起といっても 2-3 メートルのはずであるから、海水面の低下後退によっても最終的には同様の結果がもたらされる。海と降水量両面から、当時の「水」の解明が待たれる所以である。太陽活動の周期的変化（紀元前 2700、2200、1800 年前後にそれぞれグランドマキシマム、同 1300 年頃グランドミニマムがあったとされる）は特に考慮しないでよいだろうか。

2. 道

交易（インダス文化圏内、外）が重要な位置を占めていた当時の交通手段の同定は不可欠であるが、これも海水位と関連する。街道、乾期の河川路を用いる陸路、河川や海による船運を具体的に詰める必要がある。ドーラーヴィーラー Dholavira の城塞部はミュケーナイ Mukēnai を思わせるが、遙かに高い丘陵の上に立ちそれ自身急峻な丘を成すミュケーナイのアクロポリスからは港（「海のミュケーナイ」）へ連なる街道が見渡せる。途中人工的な建造物はなく、街道は丘陵地帯を右に背負い溪谷の右岸を巻くように走る。ミュケーナイの都城から遠からぬ位置に「アトレウスの宝物庫」が口を開いている。左岸は一段と低くどこまでも広がる松の森である。往時トロイア戦争から凱旋したアガメムノンが自らの居城へと港から上ってきた風景を今に見る思いがする。ドーラーヴィーラーの道はどこを通過していたのか。舟付けが可能であったのか。北側だけに開いた狭い門へ、どのような道が続いていたのか。周辺の調査が待たれる。旧街道が残されていない地理的環境（平原、氾濫原）自身が何かを語っているのかもしれない。

3. 城壁

インダス諸都市の城壁は何のために築かれたのか。先回の報告会の折り、宇野先生がまとめておられたと記憶するが、外壁の厚さ、不用の食料などを外部に捨てていることなどが防御用の城壁ではないことを物語るという。防衛施設ではない城塞という概念はヨーロッパの考古学には馴染みのない概念であろう。カーンメール Kanmer の幅 18 メートルに達するという石積みは現代のロックフィルダムを思わせる。石積みの内部に遮水性の強い粘土質などが使われた痕跡はないであろうか。水からの防御施設であれば門（出入口）は必ずしもいらないであろうし、石積みの上部平面は作業用に使われた可能性もある。上水、下水の完備（水の確保と水からの防御）は氾濫に備える施設の特徴と言える。外敵に備える施設であれば、外側に堀が作られるのではなかろうか。城郭内部の狭さは普段の生活空間ではないことを物語る。周囲には人々が生活しており、耕作、牧畜が営まれていたであろう。ドーラーヴィーラーのプールのような設備は多量の真水を蓄え得たはずであるが、カーンメールは人為の積極的な関与を必要としなかったのであろうか。農耕には氾濫後の水分を利用するとしても、家畜たちが多ければ年間を通じて多くの水が必要であったろう。井戸水の質と量によっては、それでまかなえるのであろうか。ドーラーヴィーラーとカーンメールしか知らない素人の目には、両遺跡を取り巻く環境に大きな差があったものと思われる。ドーラーヴィーラーの貯水・給水設備の規模は海水の近さ、塩分の濃さから説明されるであろうか。ドーラーヴィーラーの「居住地」はアクロポリス部分よりも低い位置にある。洪水時の水位に大幅な変動差があったものか。アクロポリスは非常時用の最後の砦（ヨーロッパの防御教会 Wehrkirche のような、ただし、水を外敵とする）とも考えられるし、当然、技術者集団や交易担当エリート、来訪者たちを包摂する「都市」の機能の中には権威的象徴的な意味も含まれよう。防御用でない城塞都市が広範な地域に多数建設され、そしてやがて機能しなくなる、あるいは、必要でなくなった理由は何であろうか。

耕作の中身、家畜の数と種類などについて、インダス文化圏内でも当然差異はあったであろう。どのような環境下で、何が具合的に栽培され（小麦、豆類、葉っぱ類、根菜、綿花?）、飼育されたものか（瘤牛、駱駝、ロバ、豚、水牛?）。同文化圏内には競合よりも協力態勢が支

配的であったように思われる。交易が支えであり、手工業（紅玉髓・瑪瑙・水晶・貝殻の加工、土器、石器、金属器、石細工、象牙細工、木製品、ラピスラズリ、金、銀?）の各地に於ける発達と相俟って合理的な選択がなされたものであろう。需要があるところ協力して生産を増やすことが得策であり、この流れに乗れなければ村落、部族の存続が脅かされるといったような、差し迫った経済環境、当時のグローバル経済の存在が想定される。これまでの報告からは、作業施設が「アクロポリス」内にあったように理解される。これは一種の都市生活者の存在を示唆し、広い意味での分業を前提とする。おそらく雇われたり連れてこられたりした異部族民ではなく、インダス文化圏の担い手自身による産業ではなかったか。この環境が崩れ、中核施設（インダス諸都市）が放棄された後、おそらく前 2 千年紀後半にアーリヤ *ārya-* (*āriya-*とも発音された) 諸部族のインダス上流域への進出が始まる。ただし、インド最古の「ヴェーダ」文献からはインダス文化解明に資する直接の言及は得られず、インダス諸都市の存在を指すと思われる記録も無い。一般に「城塞」と訳される防御柵 *púr-* や石で築かれた防御施設 *vála-* についてはさらに検証が必要であろう。異部族との抗争は屢々語られるが、直接インダス都市を指す事例はないように思われる。

4. インド・イラン共通時代とアーリヤ諸部族

アーリヤ諸部族はカーブル *Kābul* 上流を中心とした地域からカーブル川（リグヴェーダにおける *Kúbhā*）に沿って東進し、インダス上流域に進出したものと推定される。アーリヤの別の一派（おそらく、若年男子のみからなる派遣部隊）は西方に進出し、前 16 世紀メソポタミアに、フッリ人を支配下に収めてミタンニ *Mitanni* 王国を建設している。カーブル上流域一帯にはイラン系の部族が残り、何百年かを凌いだ後、ゾロアスター *Zarathuštra* による生活と宗教の改革がアレイア (*Haraiva*、現 *Herāt* 付近) に起こり、アレイア、バクトリア (*Baktriš*、現 *Balkh*)、マルギアーナ (*Marguš*、現 *Merv*)、ついで南のアラコースィア (*Haraுவதிš*、現 *Kandahar* 付近) において成功を収める。

アーリヤ諸部族の大移動の背景には何かユーラシア全般に関わる原因が伏在するはずであるが、それはとりもなおさず、インダス文化圏のネットワークが衰退する原因に連なるものであろう。あるいは、インド・イラン系

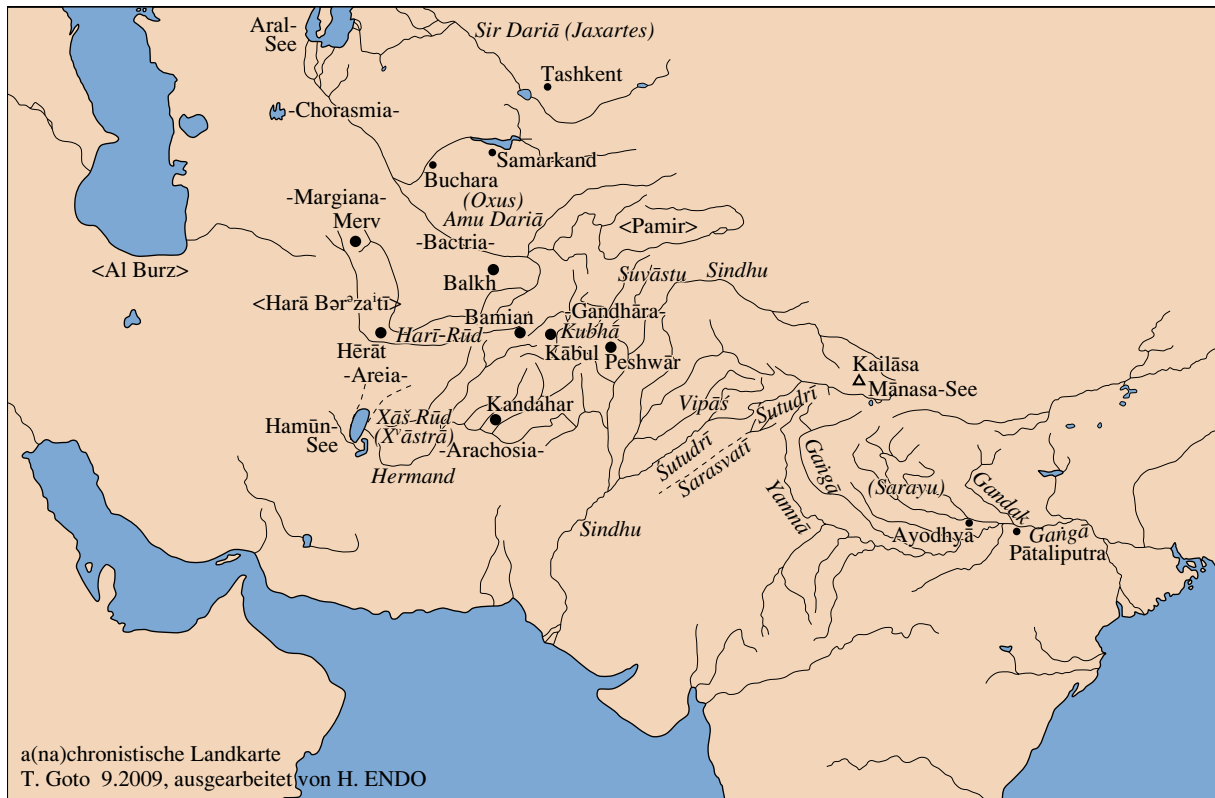


図1 インド・イラン河川図 (後藤描)

諸部族の拡大そのものが原因である可能性もある。彼らの中核は前3千年紀後半にバクトリア・マルギアーナ考古複合 (BMAC) の先進定住文化に出会い、社会制度、契約、宗教、儀礼に亘る大きな影響を受けたことが推測されるが、BMAC 諸都市の城塞はインド・イラン系諸部族の攻撃から身を守る必要から作られたと考えるのが近道だからである。ギムブタス Marija Gimbutas は、これより 1000 年あるいはそれ以上にドナウ河口付近に城塞都市が出現する理由を、攻撃的な「クルガン文化」の担い手たち、すなわち、インド・ヨーロッパ語族の基となった人々が侵出したためと解釈する。それと同様の現象が遅れて東方に押し寄せたことが窺われる。

インドアーリヤ系諸部族が西側のメソポタミアと東側のインダス上流域とに移動し、アヴェスタ語を遺した東南イラン語派の諸部族は少し南下して拠点を定めた。古ペルシャ語 (西南イラン語派) の地方名 Harauvatiš、新アヴェスタ語の Haraxšaiti はインドの河川名 Sárasvatī と同じ語 (「池をもつ」) である。Haraxšaiti は純粹のアヴェスタ語の語形と異なり、アラコースィアの方音形を反映するものと推定されているが、同じ現象は、Hermand 川の北側を並行して流れ、ハムーン湖に注ぐ Xāš Rūd の古名、新アヴェスタ語 Xšāstrā にも見られる。この

Xšāstrā は『リグヴェーダ』に現れる Suvāstu- にほぼ (suffix 以外) 一致し、後者は現在の河川 Swāt の古名である。いずれも「居住地、牧草地に恵まれた」を意味する。アレイアの古ペルシャ語形 Haraiva には Sarāyu- がほぼ対応し、新アヴェスタ語、単数対格形 Harōiium、さらに派生形容詞 hārōiui- 「H 出身の」とともにインド・イラン祖語 *saraiu- に遡る。Sarāyu- は一般にアヨーダー Ayodhyā の地でガンジス本流に注ぐ現 Sarayu に比定されるが、リグヴェーダに知られるそれはインダス河域の一河川名と思われる。語義は定かでないが、サラスヴァティーと同じく「湖沼」を意味する語に連なるか、あるいは「流れ進む」と解する。ブジの東北方には現在も「サラスヴァティー」という川が流れていることを、博物館にある地図から知った。捜せば各地にありそうである。普通名詞が部分的に残った可能性もあるが、神話的な河川に基をもつ女神の名を後からつけた可能性が高いであろうか。

5. ユーラシア古代文化ネットワーク

インド・イラン共通時代、あるいは、混在時代の諸部族が遭遇した先進文明バクトリア・マルギアーナ考古複合 (BMAC) はインダス文化圏と時代的に並行し、相互

に交流のあったことが指摘されている。共に、インドからアフガニスタン、中央アジアを経て西方に広がるユーラシアの文化ネットワークの一部を成していたものであろう。BMACの背景には東方山岳地帯を流れるアム・ダリヤー（Oxus）流域の文化、鉱産資源の存在もあったであろう。インド・イラン語派の諸部族をはじめ、競争・拡大・攻撃を原理とする経済形態を持つインド・ヨーロッパ語族の拡大・移動が「平和な」ネットワークを破断した可能性は考えられよう。以後、前13世紀末から前11世紀にかけて西方の歴史に登場する「海の民」にまで続く一連の動乱の始まりが示唆されるであろうか。自然環境の上では、前16から15世紀に懸けて地中海に地震が続き、サントリン島（Thera）は二度の大地震による破壊の後、噴火によって大半が海に没した。

インダス文明とそれを包摂するネットワークの解明は、かくしてインド・ヨーロッパ語族の東西への拡大、アーリヤ諸部族のインドへの侵出、そして、今日にまで続く部族の原理と普遍的理屈とを盾にした人類史の「グローバル化」を理解するために重要な意味を持つ。インドは、ネットワークの東端に位置し西側に開口部を持つ閉じた袋状の文化圏を形成することと、その後の歴史に比較的移動が少なく今日にまで伝わる要素の多いことから、良好な研究対象、実験場である。今回の発表の中でトーズィ Maurizio Tosi 教授が描いたユーラシア・ネットワークの全体像はとりあえず妥当なものであろうが、研究がさらに進めば、楼蘭（小河墓など）、中国、北ユーラシア、さらには、アフリカも当時の国際社会の視野に入ってくるのが予想される。

トーズィ・グループの発表中最も注目すべき新知見はロータル Lothal の再評価であろう。私に正しく理解できたかどうか定かではないが、西方からの渡来物は専らロータルに入り管理されていたことが部屋の扉や箱に用いられた多数の封泥の破片、痕跡から跡づけられるようである。「東のバハレーン」はドーラーヴィーラーではなく、ロータルであったことになる。オマーンと直接結びつけていた海運の存在、それを可能にする気象的条件が背景となったようである。すると、ドーラーヴィーラーは第二段階の大中継基地ということになるであろうか。後背地や大きな河川を背負わない事実上の島であること、インダス水域、ガッガル・ハクラー地域へと展がる扇の要の位置にあることなどが条件となっているであろうか。規模の大きさは（圏内）貿易の第一中継基地とい

う性格から説明されようし、居住域は宿泊施設であった可能性もある。インド圏内部の後背地、山間部・山岳地帯のルート、河川の道（船運と乾燥時の河床ルートと）、また、現在まで続くダウ船貿易に見られる海の道以外の、圏外への陸路、製品の行き来などが今後解明されて行くであろう。いずれにしても各発掘地の詳細な発掘報告と、周辺ないし発掘地点間の調査（道、アクセス、農耕、牧畜、鉱物）とが待たれる。手工業製品は何を「貨幣」に交易されたのであろうか。装飾品などは、遊牧民に見られるように、あるいは、子安貝のように、一種の銀行の役目を果たしていたものか。そして、印章・封泥の（多様な）機能は。

6. インダス文明の遺産

インダス文化圏には、城塞都市そのもの以外に、規模の大きい加工品、彫刻の類や、武器、明確な宗教的遺構、権威的差別に連なるものなどが見られず、一種の「おもちゃ文化」が支配的であったようである。これは、ある程度、今日まで続くインド的特徴かもしれない。後のインドに見られる複数の要素が既にインダス文明に見られ、それらはアーリヤ文化の覆いを破って表面に染み出してきた、古くて深く根づいた要素であることがしばしば指摘されてきた。インド菩提樹（アシュヴァッタ、ピツパラ）、シヴァ神、ヤクシニー（樹の女神）、リングア、スヴァスティカー（卍の右回りのもの）、七母神（サプタマートリカー）などなど。今回パルポラ Asko Parpola が発表したワニ崇拜もこれに属するであろう。それらの一つ一つをどのように価値的に文化構造の中に位置づけて理解すべきか、難問であるが、インダスのテラコッタに見られる荷車や衣装装身具の一部などが、現在各地の文物と殆ど変わらないことについてはほぼ共通の理解があるかと思われる。しかしまた、インド菩提樹などは当時からその地にあったということ以上に何かを語るであろうか。

アーリヤ系の人々は確かにインドに至り、少なくともことばの文化を統一かつ強力に貫徹した。今、ブジで話される地方の標準語は、そのようなかつて「共通語」として機能したアーリヤ系言語の一現代ヴァージョンにほかならない。しかし、ブジで出合った人々の生活からは、インダス時代以来存在し続けたものがアーリヤ文化の底に秘められて現在にまで受け継がれているという、よく言われることが本当のように感じられることも事実

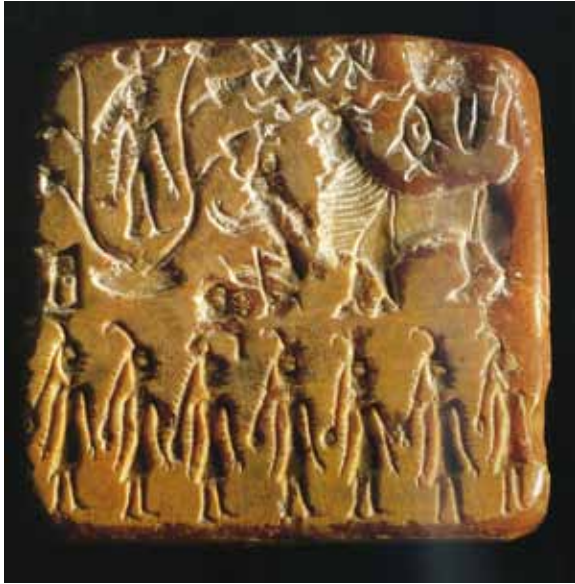


図2 インダス印章：樹神礼拝と「七母神」

展覧会カタログ Aachen 1987: Vergessene Städte am Indus. Frühe Kulturen in Pakistan vom 8.-2. Jahrtausend v. Chr. Mainz (Verlag Philipp von Zabern) 1987, p.149 より

である。衣類や音楽にはゾロアスター教徒流入、ムガル時代の革新や人口の移動、移植、流行による影響変化が見られるであろうし、一概には論じられないとしても、ブジの人々には、携帯電話を持ったハラッパー人という要素が確かに残っているであろう。しかし、いずれにしても具体的に分析確定する方法を知らない。牛は専らコブウシに見えた。アーリヤの諸部族が連れてきた（というより、その後を追ってついてきた）牛たち（古インドアーリヤ語 *gáv-* < インド・イラン祖語 **gáw-* < 印欧祖語 **gʷów-*, 英語 *cow* など同起源。シナ語古音 **ngjüŋ* [Karlgren No. 998] と同じく、擬音語がある時期に固定され、語として形成されたものであろう）は、長い年月の間に、この地方から姿を消したらしい。

現代に連なる要素として、一つ問題を提起しておきたい。図2はモヘンジョダロ Mohenjo-Daro 出土の名高いインダス印章である。菩提樹の中に角のついた冠をかぶっているように見える女神と覚しき者が立っている。それを、菩提樹の若木のような角のついた冠(?)をかぶる者が崇めているように見える。その右に、二つの波打つ形の角をもつ獣(水牛?)が控えている。下に「女神」と同じ方向を向いて、7人の女性的姿が立っている。彼女たちと樹上の女神とを比べて見ると、女神の特色は両の角にあり、頭の中央の突起物と頭の後ろに垂れ下がる部分は、形はやや異なるものの、下の7人にも共通して



図3 「壁飾り(覆い布)、グジャラート州」

国立民族学博物館特別展、大インド展カタログ「ヒンドゥー世界の神と人」1991、p.99、27 N07 (中谷純江担当) より

見られる。両腕に並んだ突起物も共通である。7人はサブタマトリカー「七母神」と紹介されることが多い。「サブタマトリカーの像は、今日でも南インドのヒンドゥー寺院や村はずれの祠にしばしば見られるもの」(辛島昇『インダス文明』NHK ブックス 1980、p.200) という。しかし、リグヴェーダにも「7人の母をもつスインドゥ(河川)たち」、「7人の母をもつ報酬(祭官たちへの贈与)」という表現が見られる。図3は現代グジャラートの大きな布で、1991年に永ノ尾信悟氏を中心に開催された大インド展の際、中谷純江さんによって収集され国立民族学博物館に収められたものである。カタログの写真が小さくて確かめにくいのが、この中に働く女性の姿が見られる。彼女たちは頭髪を長く後ろへ垂らしているが、その髪は布にくるまれ、さらに赤い紐状のものを所々巻いてそれを固定している。頭髪の一部は同じく頭上へ布で絡め上げられ固定されている。スカート部分の形も似ている。つまり、モヘンジョダロの女性の姿は、現代または一昔前のグジャラートの女性の姿に連なる。頭上の形にはヴァリエーションがある。祭りの衣装かもしれない。印章では腕の部分にも突起物が並んでいるが、民博の布からは確かめられない。20年前の記憶では心許ないので、民博の近くに居られる皆様に直接の確認を乞う。

7. Humanity and Science

インダス印章の図象や文字に地域差、または都市の機能や「格」による差異が見出されるのだろうか。後のアーリヤ文化においても標準語の作用は強力であり、特にブラーフマナ、ウパニシャッド時代から仏教興起に至る時代（前 7/6 世紀 - 4 世紀）には新知見が全インド的に求められていたようである。インダス文化圏も強い統一性、共通性を示唆する。これから詰めて行くべき事柄は多岐多層に亘る。地理学、ミクロ・マクロ生物学、家畜学、栽培・野生植物学の実証的な研究データに立って、長田プロジェクトは短期間に成果を挙げつつある。今回の諸発表から判断すると、カーンメール等に於ける地球研の影響下に達成された研究成果はインダス考古学に標準的な指標をもたらしつつある。インドをはじめ、パキスタン、イラン、米、欧ほか、世界の人材を集め、目的に添って組み立てた意義も大きい。

インダス諸都市の存在は、当時および過去の「世界」のありかたを前提とする。当時の生活実体とその諸条件は、インダス文化圏に見出される一つ一つの項目を深く分析するとともに、背景にあった当時の世界地図の中で有意であった要素を洗い出し、しかるべき位置に置いて立体的に地図と年表の中に構築することによって初めて理解される。このプロジェクトが対象とする時代と地域とは、物理的背景、環地球的ハードウェアの検証点を押さえた上で人間の営みを総合的に吟味検証するのに適した、適度に閉じた実験場である。同時に、考察の対象は広い後背地とその後の展開へと地理的・時間的に開かれている。日高敏隆先生が折に触れて強調されていた“Humanity and Science” に込められた意味が活かされ、一つの典型的成果の提出が期待できる。



図4 ドーラーヴィーラー、アクロポリス東壁上から西を望む
(後藤写)

8. 仲間たち

今回のブジ訪問では、考古学の先端的現場に居られる諸先生、地球研の精鋭諸氏から学ぶことが多かった。さらに、それぞれの分野を越えて令名高い松井健、斎藤成也、木村李花子の諸先生と一緒にいる時間が与えられ、私個人としては多に教えられ刺激を受けた。松井氏からは刺繍、銀細工をはじめ、広く研究現場のあり方を教えて戴いた。木村さんには、無論、馬についてあれこれ尋ねて教えて戴いた。ドーラーヴィーラーの二本の柱(図4)がアクロポリス部の東端に東を向いて並んでいることから、太陽の運行と関係するのではないかとの意見を拝聴したが、蓋然性のある方向を指し示しているように思われ、反芻している。「二本の柱は柱頭部が異なる形をしている。腕時計で計測したときには真東を向き、南北に並んでいるものと思ったが、ドーラーヴィーラー遺跡平面図(例えば上杉彰紀『インダス考古学の展望』2010年、p. 77、Joshi and Bisht 1994 に基づく)によると南北軸は西に10°ほど傾いている。この柱の西側には八の字状の石積基盤が残り(写真参照)、両の円形部分の中央には柱の跡が遺されている。暦のための計測設備



図5 ブジの灯明祭り

1月31日、旧暦新年に先立つ満月の夜(後藤写)

であろうか。時計にも関係するであろうか。しかしまた、そもそもインダス期のものであろうか。] 斎藤氏からは広く宇宙、生物、人間、歴史、論理について柔軟かつ毅然たる意見を伺い、ヒトの理性に対する信頼とその限界とについて、説得力ある示唆と勇気とを与えられた。私ばかり得るところがあり、このままでは済まされないように思われるので、私の領域からもプロジェクトへの貢献に努めるべく、決意を新たにしている。

例えば紅玉髓一つが世界地図を読み解く鍵となりうる。紅玉髓を手に入れて、掌においてその声を聞いてみたかったということが、今回果たせなかった一つの心残りである。商品化、流通は今も昔も、まことに決定的なことである。Inayat Agate にメールを書いて幾つか注文したいと思っていたながら、今日まで文を書くゆとりが持てずに来てしまった。瑤瑠の丘を思い出す度に、あの場で抱いた不思議な鬱な気分が蘇る。地球という現代芸術の中に私自身が放り出されたかのようにであった。長田俊樹キャプテン、宇野隆夫先生、前奈英明先生、上杉彰紀、遠藤仁の両ヒットマン、寺村裕史さん、森若葉さん、大西正幸さん、園田建さん、河村たみ枝さん、神澤秀明さん、山田智輝さん、カラクワール、シンデ両先生はじめ、インドで出合った皆様、皆様に感謝。インドではぶじであった我が身も、仙台に戻ってから下痢を起こし、一日寝込んだ。医者に診てもらったところ、古典的病原性大腸菌 O1 (オー・イチ) 号とのことであった。「病原菌のホームラン王です」とはしゃいで何とかごまかした。

カーネリアンが結ぶ時空

——インダス文明と南アジアの工芸の人類学

松井 健 (東京大学東洋文化研究所)

ブジ・ラウンド・テーブル

Bhuj Round Table 2010 : International Conference on Gujarat Harappans and Chalcolithic Cultures が 2010 年 1 月 28 日から 31 日まで、インド・グジャラート州のブジで開催された。たしか 2009 年の 10 月頃に初めての通知があったが、大学の入学関係の諸行事の重なるこのタイミングでの開催に驚いたことを覚えている。研究所勤務の私も、大学院の入試関係の仕事をなんとか免除してもらっての参加となった。何度もインドのラージャス

ターン州、グジャラート州は訪ねているが、ブジのあたりは余程のことがないとなかなか訪問する機会がなく、インダス・プロジェクトの発掘しているサイトなどへのエクスカージョンもあるということで、楽しいシンポジウム参加となった。

ブジの町のはずれにあるシンポジウム会場のホテルが宿泊場所でもあり、時間が有効に使える設定になっていた。到着した 27 日にはすぐに、ブジの町のバザールに出かけたが、周辺が染織刺繍で有名なカッチ地方のため、いろいろな布が売られていて目を楽しませてくれた。バザールには、ミラーワークと呼ばれる鏡の薄片をぬいつけた刺繍の一種のために、丸や三角の鏡の薄片を売っている店まである。しかし、町のそこここにはまだ 2001 年の大地震の爪跡とおぼしき空地が残されており、まだ復興は完全とはいえないようにみえた。人口の一角が死亡したというから、復旧はそう簡単ではないのだろう。それでも、町は活気にあふれ、人びとは外国人観光客にすれておらず、私がよく知っているジャイプルのようにしつこいつきまといに閉口することもなく、楽しくバザールを散策することができた。

ブジの町は外壁で囲まれた城塞都市になっているらしく、周囲にいくつかの石造のアーチ門がしつらえられている。これらの Mahadev 門、Bhid 門、Sarpat 門、Patwadi 門といった門は、自動車道路をつくるために、城壁が壊されたためにぼつんと切り離されて保存されるかたちになっているが、なかなか堂々とした重厚な造りである。町の西側には Hamirsar 湖があって、水鳥が遊ぶ美しい町である。湖を臨んで立派な博物館もある。町の中心のバザールはショロフ・バザールといって、多くの金銀宝飾の店が並んでいる。だいたい高価な品物を扱う店が集中するのが、バザールの中心とみて間違いはない。ショロフ・バザールは、町の中心であるアーイナー・マハルという宮殿につき当たるようになっている。すぐ近くには、コロニアル・スタイルの旧野菜市場などもあって、味わいのある町並を堪能することができる。

銀の装身具のいくつかは、もうラージャスターンでは骨董扱いられているのに、この町では新品がまだつぎと製造されているのには驚く。ラバーリーという民族の男がつける足の指の指輪など珍しいものも散見される。とにかく、工芸の盛んな土地であることは、バザールを一步進むごとに感じられる。

会場は町の中心からすこし離れた幹線道路沿いにあっ



写真1 カルセドニーやアゲイトの原石の堆積
(マルダク・ベートにて)



写真3 マルダク・ベート採集のカーネリアンの原石

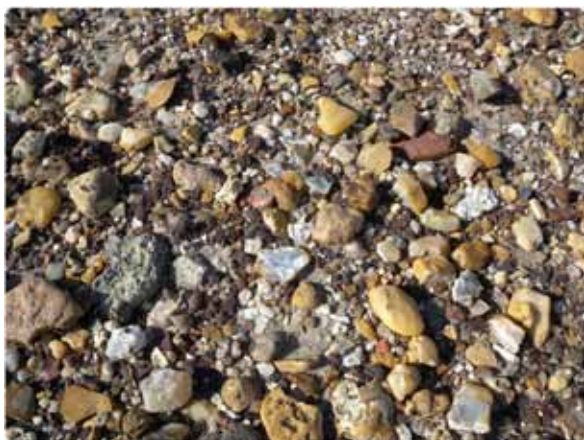


写真2 ほとんどが、カルセドニー、アゲイト、石英など

て、市内の老舗ホテルのアネックスというべきものでスタッフはよく訓練されていて、設備も立派なものであった。残念ながら、朝6時頃から夜11時頃までは、道路を通る大型トラックとその警笛でちょっとうるさいという難点はあったが、なかなかしゃれたつくりになっていて、シンポジウムもティータイムもランチもなかなか快適であった。28日午後からラウンド・テーブルは始まった。この内容についてはおそらくインダス考古学に詳しい方が別途報告されることだろう。

カーンメールからマルダク・ベートへ

シンポジウム2日目にカーンメールへのエクスカッションが組織された。ブジから約3時間のドライブ。小さいとはいえ、城壁に囲まれた遺跡は堂々としたもので、もう発掘を終えて埋め戻されているものの端正なたたずまいが想像された。遺丘は全面土器片でおおわれているとあってよい状態で、いやがうえでもインダス文明の人びとの暮らしぶりを考えざるをえなかった。そんな土器

片に混ざって、硬い光を反射するカルセドニー（玉髓）の破片も数見された。石器やビーズをつくるために、カーンメールの住人が外部からもち込んだものであろう。加工のときにでたと思われる破片が散らばり、石刃を割りとったあとの石核と思われるものも見られる。土器の赤いにぶい光と別に、白っぽく硬く太陽光を反射するために、よく目立つように感じられた。

時間が限られていたが、カーンメールからさらに進んで、これらのカルセドニーの原石のあるところへいくことになっていた。途中の町で車を乗り換える。私がよく行っていたパキスタンでいうところのカッチャー・ジープ（やわい四駆）ではだめで、パッカー・ジープ（強い四駆）でないと行けないということらしい。聞くと、リトル・ラン（Little Rann）を横切るのだという。カッチの干潟を横断するというのは、えがたい体験、いやがうえにも期待がふくらむ。それ以上に気になるのは、ビーズにも用いられる赤いカーネリアン（紅玉髓）などのカルセドニーの原石が、一体どんなふうにして見つかるのだろうかということだ。インダス古代人も採集に行ったかもしれないと想像すると、興奮を抑えることができなかった。

車は製塩場の横を通りすぎると、まっすぐに延びる轍に従ってリトル・ランを横切っていく。運転手と助手はグジャラート語しかしゃべらないが、運転手の横に坐っている私をどうも愛想がなくて、パキスタン人みたいだ、と言っているらしい。インドでは手で食事をすると、すぐにムスリムかパキスタンに長く生活している人間と見破られるのだが、ただ坐っただけでこういうことを言われたのは初めてで驚く。やはりパキスタン国境が近いからか。そうこうしているうちに、向こうに低い丘が

連なり、ヒンドゥー寺院らしいものが見えてくるようになる。この寺院を左手に廻り込むようにして車が止まる。高さ数メートルのこぶし大くらいの石が積み重なった丘が続いている。リトル・ランの泥のように細かい地面から、石の丘が立ち上がっているという感じである。よく見ると、これらの石は、すべてカルセドニーやアゲイトの原石である。割ると、その割れ目は、白や黄、青や赤の美しい半透明の光沢に輝いている。強い太陽光のなかで、キラキラと美しく、断面が縞状のもの、雲状のもの、同心円状のものと同様もいろいろあって、まったく見あきない。このように色模様が均等でないものをアゲイト（本来は、このアゲイトだけを瑪瑙と呼ぶ）、均等なものをカルセドニーと呼ぶらしいが、日本では両方をあわせてメノウと呼ぶことになっている。

美しいメノウのなかでも、インダス古代人のお気に入り、カルセドニーのうちの赤いカーネリアンであったことが知られている。彼らのネックレスは、カーネリアンを加工してビーズにして、それを美しく配列したものである。ハラッパから出土しているカーネリアンは水滴形に加工して周囲を金で囲ってペンダントにされているし、アッラーフディーノからは、長い筒状のカーネリアンのビーズが6本ずつ並べて、それを6組使う豪華なベルトが出土している（Agrawal 2009 : 100, Nandagopal 2006 : 97）。

カーネリアン・ビーズ

当然、このように重要な技巧（あるいは、当時の産業）であるから、考古学者も大いに注目しており、インダス・プロジェクトでは遠藤仁さんがカーネリアン・ビーズについて、研究している。遠藤さんの研究は、石器づくりとビーズづくりを統一的に扱うという点と、現在もおこなわれているカーネリアンのビーズづくりを現在主義の立場から検討してみようとする点で、二つの大きな特徴をもっている。その成果の一部は、すでに報告されている（遠藤 2008）。

驚いたことに、今でもカーネリアンのビーズづくりが、ほとんど手作業でおこなわれているということを、遠藤さんの報告（前記）で知った。そのうえ、カーンバートでアゲイトなどのビーズをつくっている工房を助けるために、このシンポジウムに参加している学生がその工房の作品をもってきており、即売してくれるということがわかった。さっそく品物を見せてもらって、もったいな

いような安価で品物を分けていただいた。さらに、そのときに、これらの石からつくられたペンダント・トップを見せられて、また驚いた。何と、それらのトップは、これらのカーネリアンなどを打ち欠いて、細石器にしたものだった。色が美しいゆえに、すばらしいペンダント・トップになるが、よく見ると、その細部の加工は、まさに、細石器づくりの技でつくられたものだった。こうした金石併用時代の技法がまったくそのまま伝えられているのである。石器が、今の時代ゆえに、装身具になっているのである。

金石併用時代から延々とカーネリアンはビーズや石器に加工されてきたということであろう。石刃などに用いる加工は、カーネリアンなどカルセドニーの原石を打ち割ることを基本としておこなわれてきた。打つ力の強さや方向をコントロールするために、相当に洗練された技法が用いられたにせよ、基本はこの打ち割るという作業にあったとみてよいだろう。

一方、ビーズは、それに加えて、穴をあけてそこに何らかの紐を通して身につけることが意図されている。ビーズの素材よりもすこしでも硬い石を用いて、すこしずつ穴をうがったのであろう。今日でもおこなわれているカーネリアン・ビーズづくりの手作業と、それはあまり変わらないものであつたらう。長い石のビーズは、この穿孔の技術が難しく、インダス地方の専売だったらしく、メソポタミアあたりへも輸出されていたらしい。技術的にも一段難しく、実用性を欠く。ゆえに、石器づくりのあとに、奢侈品であるビーズづくりがおこなわれるようになったと考えるのが普通であろう。しかし、そのように考える必要はないかもしれない。

フランスの高名な科学史家で哲学者のガストン・バシュラールは、『火の精神分析』という名著（バシュラール 1969）において、火の起源について興味深い見解を示している。その内容は直接この著書にあたっていたかくとして、彼は、火は実用性のゆえに発明されたのではなく、人間の深い夢想から人びとの生活のなかに生まれ出て用いられるようになったのではないかと考えている。カーネリアンの利用を、必ずしも作物の刈り入れや動物の解体といった実用のための石刃の作製のあとのことと考える必要はないかもしれない。この美しい石を何とかして身につけてみたいという欲望が、この石をあれこれといじくる動機になったと考えるのは、うがちすぎであろうか。



写真4 ネパールのカーネリアンのネックレス

とにかく、インダス文明時代の人たちを夢中にさせたカーネリアンなどのビーズは、今日よりもはるかに稀少で高価なものとして取り扱われたことは確かであろう。私は、このカーネリアンのビーズが、南アジアの古代文明でこのように重用されていたことを知って、このカーネリアン原石の産出されるインドのグジャラートから、遠く離れたネパールのことを思い出していた。

カトマンドゥのバザールから

私は、今回の Bhuj Round Table に参加するまで、昨年の12月から2回に分けてネパールのカトマンドゥ盆地を訪ねていた。私自身の工芸のグローバル化の問題に中心を据えた科研の調査であった。カトマンドゥのツーリストの集中するタメルというバザールには、宝石、貴石の装身具や、一見古そうに見える民具や仮面や彫像などを売る店もたくさんある。新しい装身具のなかにも、カーネリアンの石を加工したネックレスなどが見られるが、そればかりではなく、使われたカーネリアンのビーズのネックレスもときに売られている。

店の人たちは、山の人びとがやっていたものだ、とこともなげに語るが、カーネリアンのビーズは、ひとつひとつ結構痛んでいて、割れた面がすり減っていて、相当使い込まれているのがわかる。一連のネックレスになっても、ひとつひとつがビーズにばらされたものが、重さで売られている。通常、トルコ石やラピスラズリのビーズより安い、古いものは、新しいものより高く売られている。カトマンドゥ盆地の向こうの山地では、今でもこうしたカーネリアンのビーズを愛用している人たちがくらしているようなのだ。

さらにより東のネパール領の外に、ナガと呼ばれる人

たちがいて、彼らもカーネリアン・ビーズの愛好者であることが知られている。さきにふれたアッラーフディーノから出土したカーネリアンの長いビーズが6本ずつ並べられている「ベルト」とされているものは、ナガ人の民族例からひよっとすると首飾りである可能性がある。というのは、ネパールの東に分布するナガ人の男たちの首飾りは、やはりこのように大きくベルト状になっていて、長いカーネリアンやガラスのビーズを同じように何本も並べて用いている。もっとも、ナガ人はミャンマーとインドの国境付近という今日の分布地へは、東からやって来たと思われるから、インダス文明そのものの後継者とは考えられないのだけれども。

ツーリストは、通常は新しく加工されたビーズのネックレスやピアスを好むようだが、私などはつい古い、汚れたカーネリアンのビーズに目がいってしまう。聞くと、カーネリアンの赤色は血を連想させるため、それを身につけていると元気になる、というような考え方もあるらしい。いかにも、民俗的な発想である。このカーネリアンの色は、人工的につけることができるのだという。シンポジウムの会場で配られた Kuldeep K. Bhan 教授のパンフレット (Bhan n.d.) では、3回壺に入れて密閉して加熱することになっている。加熱によって、赤の発色が強くなるらしい。

遠藤さんによると、今では、別に3回とはきまっておらず、発色がよければ2回といったこともあるのだという。しかし、石を土器に密封して土器ごと「蒸し焼き」にするというのは、おもしろい。というのは、おそらく、この技術は、土器の製法と何らかのつながりがあるのではないかと想像されるからである。加熱して赤色を増すということは、カーネリアンの血との連想を強化するように感じられる。

カトマンドゥのカーネリアン・ビーズの玉は、楕円だったり円盤だったりして、単純なかたちをしていて、穴があけられていることが多いが、ときには、インドネシアのビーズ（ガラス製）でよくみられるうり玉というかたちに加工していることもある。これまた遠藤さんによると、金属器の使用が始まらなくては、この形には加工できない、とのこと。カーネリアン・ビーズは、約千年の時間を経て、それぞれの時代に可能な最新の技術によって加工されて、人びとを飾ったのであろう。やがて、それほど上等の石とみなされなくなってからは、都市的な中心から田舎や僻地へと伝えられ、今カトマンドゥで見

るように、ヒマラヤの山地の人びとに愛用されるようになったのかもしれない。

カーネリアン・ビーズは、はからずも私をインダス文明の考古学と南アジアの工芸の接するところへ案内して、南アジアの工芸がとんでもなく深い歴史をもっていることに気付かせてくれた。この機会を与えて下さったインダス・プロジェクトのリーダー長田俊樹教授には、まずお礼を申しあげる。遠藤さんはじめ、前李英明さん（広島大学大学院教育学研究科）にはマルダク・ベートのカーネリアンの「由来」について議論の相手をつとめていただくなど、今回のシンポジウムに参加しておられた方がたからはいろいろと貴重なお教をいただいたことも、感謝とともに書き付けておかななくてはならない。

引用文献

Agrawal, D. P. 2009 *Harappan Technology and Its Legacy*.
New Delhi : Rupa & Co.

バシュラール、ガストン 1969 『火の精神分析』（原著 1939）
せりか書房。

Bhan, Kuldeep K. n.d. *Temporary Exhibition on the Craft and Technology of Indus-Saraswati Civilization C.4600-3900 B. P.* . Vadoadara : Museum of Archaeology , Department of Archaeology and Ancient History, Faculty of Arts , The Maharaja Sayajirao University of Baroda.

遠藤 仁 2008 「グジャラート州カーンバートのビーズ制作工房」『インダス・プロジェクトニュースレター』4:1-5 頁。

Nandagopal, Choodamani 2006 *Arts and Crafts of Indus Civilization*. New Delhi : Aryan Books International, Bangalore : International Centre for Indian Art and Cultural Studies

人々は街を捨て、村に還る

斎藤 成也（国立遺伝学研究所）

最近、インダス文明の二つの遺跡を訪れる機会があった。ひとつは本インダスプロジェクトで発掘されたカーンメール遺跡であり、もうひとつは、インド国内でおそらくもっとも有名なインダス文明の遺跡だろうと思われる、ドーラーヴィーラー遺跡である。

カーンメール遺跡には立派な城壁があったが、その

内部は狭く、おそらく 500 平方メートルはなかったと推定されている。このようなところでは、せいぜい 100 名程度しか生活できないのではなからうか。なぜこのような小さな空間を城壁で囲んだのだろう。そこで城壁で囲まれた街について考えた。

竹内実著『北京—世界の都市の物語—』（文春文庫）の冒頭に、かつて城壁で囲われていた北京市の美しさを懐かしむ文章がある。現在でも、南京市と西安市は城壁が残っている。また市街のことを「城市」と呼ぶ事が中国では一般的なようだ。万里の長城も、住民全員を城壁の中に囲い込むという発想から来ているのだろう。ヨーロッパの都市も、かつては城壁のなかに市民が住んでいた。古代ギリシャのポリスの延長だろうか。

日本はどうだろう。中国の長安などに範をとりながら、平城京や平安京にまともな城壁を作らなかった。この意味で、城壁で囲われた城と都市を基本的に分離していたインダス文明（近藤 2007）と、共通する意識があるのではなからうか。戦国時代の山城も平城も、基本的には街は城の外側にあった。

都市はインダス文明が終わった時にいったんインドの土地から失われたが、その後千年以上経過した後に、ガンジス川流域にはマガダ、コーサラ、マトゥラー、ラージギル、パータリプトラなどの、仏典にも登場する都市が生じた。これらの都市は、中国的あるいはヨーロッパ的な、全体を城壁で囲んだ形態であり、インダス文明の都市とは異なっている。しかしこれらの都市の大部分は、西暦 3 世紀以降には衰退していったのである（上杉 2007）。インダス文明で繁栄した都市が消えていった現象が、ガンジス流域とはいえ、また生じたのだ。

今のインドの人々も、かつてのインダス文明期の庶民も、どちらもひょっとして都市生活をあまり好きではないのではと、ふと思った。私自身があまり大都市を好きではないから、他の人もそうであってほしいという願望が入っているのかもしれない。

とりあえずそう考えると、釈迦やいわゆる六師外道が登場した、インドにおける諸子百家の時代に、出家して沙門となる生活様式がはやったことが、なんとなく理解できるのではなからうか。つまり、当時勃興した都市生活に対する反感もそこにあったのだと。

この仮説は、インダス文明が「滅亡」したというのは、ある意味では間違いであるという主張とつながる。仮に文明の興亡の尺度を人口とすれば、ハラッパーやモヘン

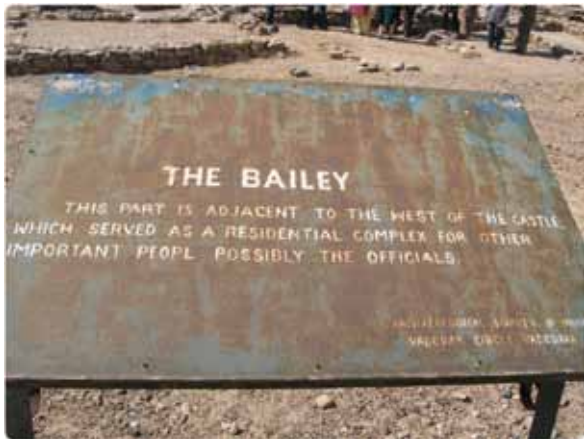


写真1 ドーラーヴィーラー遺跡のパネル

ジョダロのような大きな都市は消えてしまったとしても、インダス文明地域全体の人口が減らなかったら、インダス文明、あるいはすくなくともハラッパー文化は滅亡していなかったことになるからだ。この場合、ポストインダス文明の人々は都市を捨てて、村落に戻ったのである。あるいは嬉々として？

この主張を受け入れると、空想はさらに膨らむ。ハラッパーやモヘンジョダロを頂点とする、大・中・小の都市ネットワークとしてのインダス文明を支配していたのは、ひょっとすると外来の人々だったのではなかろうか。結局はメソポタミアから、当時「メルッハ」と呼ばれていた東の異境の地に進出した、というか、落ち延びた人々が支配階層を形作り、彼らとその子孫が築き上げたネットワークが、メソポタミアおよびそれに隣接する東部（後のペルシア地域）の政治情勢の変化と、自然状況の変化（グジャラート地域の海水面低下）による港湾の衰退という双方の要因により、あるときがらとくずれていったのではないかと。このとき、支配階級を形成していた異人達は、メルッハを去り、メソポタミアに帰っていった。そして残された土着の人々は、村落の生活に戻っていったのではなかろうかと。広大に広がるグジャラート州のカッチ湿地を遠望しながら、当時残り少なくなった遠洋航海船に乗り込んで、メソポタミアをめざしてインダスの地を去る人々の姿。

インドでおいしいインド料理をぱくつきながら、私はそんなことを夢想した。この仮説を検証するには、いくつかの方法がある。まずは人口変動の推定だ。こちらはすでに上杉彰紀さんが検討をはじめておられる。また今回出席した国際会議の参加者の何人かにお聞きしたところ、インダス文明の「滅亡」のあとも、人口が減少した

ことはなかったとのこと。これは、後漢後期から三国時代に至る戦乱によって、中原の人口が大きく減少したとされる中国の状況とは異なるように思われる。

もうひとつの検証は、インダス文明当時の人々の遺伝的多様性の推定だ。もし支配階層と一般住民が、遺伝的に異なる系統であることが示され、しかもそれらが片方は西アジアの集団により近縁であり、もう片方は、たとえば現代インド南部の人々の近縁だとなれば、とてもおもしろい。私はこのような古代DNAの研究をすることで、2009年度からコアメンバーに加わったのだが、インド過去数千年の気候はDNA分子をことごとく切断し去ってしまったのかもしれない。この場合、人骨は残っていてもそのなかにDNAは残らないことになる。

もう一度、今回訪問したインダス文明の遺跡について考えてみたい。カーンメール遺跡は、なぜあのような分厚い城壁を構築したのだろうか。そのなかに常時住まない場所だとすれば、緊急時に避難するためのものという考え方が生じる。城壁にはもうひとつ、「文明」の象徴という見方もできよう。城と考えると他の人間集団からの攻撃から守るものと思いがちだが、壁は人間だけでなく、いろいろな自然災害から内部の人々を守ってくれる。当時、地理的に比較的近くにドーラーヴィーラーなどのより大きなインダス文明都市の存在していたカーンメールの人々は、文明の象徴という意味も込めて、城壁を構築したのかもしれない。

最後に、ドーラーヴィーラー遺跡を見学することで知った英単語のこと。写真は、この遺跡で見つけた、英語での遺跡紹介パネルである。その冒頭にある Bailey とは、城壁とか郭内を意味する。この単語は、これまでに繰り返し見ている映画 "It's a Wonderful Life" (邦題「素晴らしき哉、人生」) で、敬愛する故 James Stewart が演じた主人公ジョージ・ベイリーの苗字としてだけ、私は記憶してきた。インダス文明遺跡で出会い、その苗字の意味がわかってうれしかった。

引用文献

上杉彰紀 2007 「歴史時代」山崎元一・小西正捷編『南アジア史1 先史・古代』山川出版社、41-56頁。

近藤英夫 2007 「インダス文明」山崎元一・小西正捷編『南アジア史1 先史・古代』山川出版社、24-40頁。

Pre-Modern Climate Change - Causes and Human Responses Stine Rossel Memorial Conference

寺村 裕史（総合地球環境学研究所）

2009年10月21日～23日に、デンマークのコペンハーゲン大学で、表題のカンファレンスが開かれました。過去から現在までの気候変動に焦点を当て、それに対する人間の反応をテーマにした会議です。具体的には下記4つのセッションが設けられ、完新世の気候復元や、環境汚染の考古学的データに関するトピック、安定同位体を用いた分析など、多様な角度から議論がなされました。大枠としてのテーマはプロジェクトとも非常に関わりのあるもので、環境と人間との関わりという意味で、現在の研究情勢を知るにはおおいに参考になったと思います。プロジェクトからは、長田俊樹・前李英明・寺村裕史の3人が出席しました。

Conference Sessions

1. Holocene Climate Reconstruction
2. Responses of Complex Societies to Climatic Variation
3. Archaeological Evidence for Pollution and its Ecological Implications
4. Stable Isotope Analysis in the Middle East



カンファレンス会場風景

19th Congress of The Indo-Pacific Prehistory Association

寺村 裕史（総合地球環境学研究所）

2009年11月29日～12月5日の日程で、ベトナム

のハノイにおいて、表題の大会が開催されました。

"Themes related to the archaeological record during the Holocene (geographical or chronological foci)" というテーマのもと、そのうちの1つのセッションとして "Recent Advances in Harappan Archaeology in India" が設けられ、長田俊樹を座長（兼発表者）として、宇野隆夫・J.S.カラクワール・寺村裕史が参加しました。長田は、プロジェクトリーダーとしてインダスプロジェクトの概要、宇野は主にファルマナー遺跡の発掘調査報告、カラクワールはカーンメール遺跡の発掘調査報告、寺村はプロジェクトにおけるGIS利用について、の口頭発表をそれぞれおこないました。本来であれば、あと数人のインド人研究者の発表が予定されていたのですが、日程の都合がつかずに不参加という残念な結果となり、発表者4人だけのセッションになってしまいました。ただ、インダスプロジェクト（おもに物質文化研究グループですが）の現時点での成果を、海外の研究者の前で報告できたことは、今後にもプラスになることだと考えています。



発表会場での事前準備の様子

第7回フィールドリサーチセミナー

「インド言語地図を読むー南アジアの言語分布の可視化ー」

大西 正幸（総合地球環境学研究所）

今年の3月15日、言語研究班は、熊本大学にて、熊本大学社会文化研究会との共催で、「インド言語地図を読むー南アジアの言語分布の可視化ー」と題するセミナーを開催しました。熊本大学との共催のセミナーは、去年3月の「文明と文字：記憶 vs. 記録」に続いて、2

回目です。今回のセミナーでは、一般向けに、まもなく完成予定の『南アジア言語地図』の内容を紹介することを主眼としたもので、「インダスプロジェクト言語研究会」のメンバーである長田俊樹、大西正幸、児玉望に加え、地図作成に係わった寺村裕史と稲垣和也が、それぞれの担当部分について講演を行いました。

セミナーでは、まず長田が地球研およびインダス・プロジェクトの概要を説明し、『言語地図』作成の経緯について話しました。

続いて、寺村が、GISを用いた地図作成の原理について、また稲垣が、南アジアを含む世界の言語のコード化について、説明しました。

次に、大西が地図全体の構成について説明した後、インド・アリア諸語の分布について講演しました。続いて、休憩をはさみ、児玉がドラヴィダ諸語の分布、長田がムンダ諸語とチベット・ビルマ諸語の少数言語の分布について、講演しました。

セミナーには、言語学科の大学院生や、他学部の手話を専門にする先生等の参加もあり、講演のあとも活発な質疑応答が続きました。小規模なセミナーながら、南アジアの言語についての関心を



寺村による発表の様子

高めるという意味ではなかなかの成功だったと言えると思います。

メンバーとしては、今後も、熊本大学との共催によるこのような催しを続けたいと考えています。

国際シンポジウム開催のお知らせ

8月20日(金)、21日(土)に文明環境史からの視点で気候変動説を考える国際シンポジウムを地球研の講演室にて開催いたします。インダス・プロジェクトが所属しております地球研の文明環境史プログラムの主催で、複数のプロジェクト共催のシンポジウムです。題目および発表内容は下記。時間の都合がつく方は是非ご参加下さい。

Rethinking on the Impacts of Climate Change in the Past

20, August (Fri) 13:00-17:10

"Greeting" (N. Tachinoto)

"The Mesopotamian Response to Climate Change: Collapse as Adaptation" (L. Ristvet)

"Diet and Climatic Shifts: Their Interrelationship During the Indus Civilization" (S. A. Weber)

"The Importance of Small Scale Approach to Understand Environmental Change, Landscape and Resource Exploitation: The Example of Holocene North Gujarat (India)" (M. Madella)

"Changing Agricultural Strategies in Relation Tosocial and Environmental Changes at Harappan Kanmer, Kachchh, Gujarat" (A. K. Pokharia)

"Investigating the Interplay between Climate Change and Culture-history among Hunter-gatherer Societies at the



セミナーのポスター

Pleistocene/Holocene Transition in Northern Eurasia" (P. Jordan)

21, August (Sat) 9:30-14:30

"Challenge of High-Resolution Paleoclimatology: its Potential Impacts for Understanding of Relationships between Climate and Societies" (T. Nakatsuka)

"Climate Change, Subsistence Intensification, and Human Impacts on the Jomon Landscape" (J. Habu)

"Environment and Socio-Cultural Changes in the Prehistory of Okinawa" (H. Takamiya)

"Discussion"

インダス・プロジェクト報告会のお知らせ

プロジェクトメンバーの皆様にはすでに電子メールで詳細を通知してありますように、8月27日(金)、28日(土)にインダス・プロジェクトでは、毎年恒例となっております報告会を地球研の講演室にて開催いたします。開催時間は27日が13:00-17:30、28日は19:30-16:30となっております。

今年もインドやパキスタン、アメリカ、スペインから来日された外国人研究者から報告が寄せられる予定です。地球研の日本人メンバーによる報告もごさいます。南アジアの最新の遺跡情報が得ることができる場ですので、時間の都合がつく方は是非ご参加下さい。

招聘外国人研究者のご紹介

今年度も2名の招聘外国人研究者がインダス・プロジェクトに来日しております。アメリカのワシントン州立大学からS. A. ウェバー (Weber) さんが6~8月の3ヶ月間、インドのビルバル・サハニ・古植物学研究所からA. K. ポーカリヤー (Pokharia) さんが7~9月の3ヶ月間滞在しております。

両名とも植物考古学がご専門で、インダス・プロジェクトで発掘したファルマーナー遺跡とカーンメール遺跡の植物遺存体の分析を担当しております。今年度末刊行予定の両遺跡の発掘報告書作成に向け、彼らと議論を重ねております。どうぞよろしくお願いたします。



Steven A. Weber さん



Anil K. Pokharia さん

編集後記

ニュースレター第7号をお送りいたします。この度も発行が遅れてしまい、申し訳ありません。今回は昨年度末にインド、グジャラート州ブジで開催された日印共催の国際会議の特集となっております。ご寄稿いただいた方々に篤くお礼申し上げます。

京都は蒸し暑い日が続いておりますが、発掘報告書作成に日夜励んでおります。今年度末の刊行をお待ちください。(遠藤 仁)

インダス・プロジェクト ニュースレター
第7号

プロジェクトリーダー 長田 俊樹
編集・発行 インダス・プロジェクト
発行日 2010年8月5日

〒603-8047 京都府京都市北区上賀茂本山457-4
大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
総合地球環境学研究所
URL: <http://www.chikyu.ac.jp/indus/index.html>